月のヒカリ

最終巻。

著 モカ

神隠し。

この半年ずっと空席の席がある。教室の窓側の端の席だ。
ついつい気になって授業中にも関わらず眺めてしまう。席の主は、この半年学校に姿を現さない。

彼女は、何時も退屈そうに窓の外を眺めていた。頬杖を付き肩まで伸びた真っ直ぐな髪を風になびかせ何処か遠くを観ていた。 僕には、 その姿がとても眩しく見えた。きっといつか彼女は、何処か僕の知らない世界に旅立って行くのだろう。自分が、そんな彼女を眺める事しか出来ずに終わってしまう事に薄々気付いていた。
そして彼女は、皆の前から姿を消した。

警察に捜索願いを家族が出したのは、彼女が居なくなって3日後だった。親類や友達家など彼女の行きそうな場所を探したが何処にも彼女の姿は無かったそうだ。
最後に彼女の姿を見たのは弓道部の一年生だった。彼女が一人で弓道場に入って行く所を目撃したそうだ。彼女が弓道場に居た証しに彼女の弓が的の側に落ちていた。彼女が弓道場に居たのは間違いなかった。 だがその後の足取りは掴めず捜査は難航しているようだった。
神隠しなどと騒ぎ立てる生徒がいるが、正しくそう言っても良いぐらい半年たっても彼女の消息は掴めていなかった。

春が過ぎ夏が来て、知らぬ間に秋になっていた。
彼女が観ていた窓の外の風景も移り変わり桜の花で桃色に色付いていた風景は、枯葉色へと変わっている。
文化祭が近く委員になっていたので放課後会議に出席し下校しようと靴箱に向かうと外は暗くなっていた。それに加えて空には雷雲が雨もポツリポツリ降って来ていた。足早に校門に向かおうとした時だった。雷雲が唸り出し雨が勢いを増して降り出し閃光の様なものが目の前を通り過ぎた。落雷が近くの松ノ木に落ちたのだ。松ノ木は、二つに割け燃え上り火の粉が舞い上がっている。
火の粉から逃れようと側にあったプールを囲うフェイスを乗り越え中に入った時だった。水が張ってあるプールの中央目掛けて落雷が落ちた。その瞬間にプールの水は閃光と共に一気に蒸発し消し飛んだ。
目の前で起こった出来事を消化できずに唖然とプールの底を眺めていると落雷に照らされて人影が微かに見え我に返った。 誰かがこの落雷に巻き込まれ倒れているのだと思い助けなくてはとプールの底に飛び降りた。
人影に近づくと長い髪と着ている物で女性だと判別出来た。
息をしているか確認するために顔に掌を近づけると吐息がかかる。まだ、生きている。彼女を抱き抱えプールサイドによじ登ると落雷は、おさまり雨も止んでいた。プールを照らすライトも正

常に戻ったらしく一斉にプールを照らし出した。
ライトの明かりが戻り辺りが明るくなったので彼女の顔を確認する。すると半年前から行方不明になっていたクラスメートだった事に驚いた。彼女は、ボロボロの異国の服を纏い腹部には何かに刺された跡の様なものから大量の出血をしているようで服が血液で汚れている。
何がどうなっているのかこの時の僕は分からず助けを求めて警察に連絡を入れていた。警察から病院に通報行ったのだろう少しすると救急車のサイレンが辺りに響き渡っていた。

目覚め。

　目が覚めて、ヒカリが最初に見たのは白い見慣れ無い天井だった。
辺りには、消毒液の臭いが漂っている。自分が元の世界に戻り病院のベッドに横になっている事を驚くぐらいに直ぐに理解した。
体がだるく直ぐには動けそうに無かったが、何かが自分を呼んでいる事をヒカリは感じていた。
黒龍は、ヒカリを空の器であると言った。きっと、白龍がヒカリを呼んでいるのだ。いつ白龍は、ヒカリを器として選んだのか。きっと、初めて月下に会ったあの時だろう。自宅の庭にある今は、枯れてしまった桜の木の下で彼と出会ったあの時から私達は、繋っていた。今なら分かる、自分がセブンズドアになぜ召還されたのか。

　ヒカリは、ベッドから起きあがろうとするが体のあちこちが軋み動かなかった。再びベッドに倒れ込む。 動かない自分の体が怨めしかった。それでも、ベッドシーツにしがみつき這うようにしてベッドから降りたと言うよりは転げ落ちた。ベッドからドアまでは、ほんの数メートルしかないと言うのに、彼方の如く感じられた。こんな所で休んでいる暇はなかった。彼が、月下が闇の底に落ちて行きヒカリの腕をすり抜けて届かなくなる。
壁に持たれる様にして部屋を出た時だった。
「木ノ葉 。」
と誰かがヒカリを呼び止めた。一瞬、誰の事かと考えた自分に驚いた。
木ノ葉　ヒカリは、セブンズドアではただのヒカリだったからだ。
急に目眩がして、その場にヒカリは倒れ込んだがヒカリと呼ぶ懐かしい声に反応し目を開けるとそこには義理の兄である夜月　隼人の姿があった。
隼人は、ヒカリを抱き上げるとベッドへ運んだ。ヒカリの心臓の鼓動が早くなる。久しぶりに会う隼人にときめく自分が居るのにヒカリは気づいた。でも、それ以上にセブンズドアに召還される以前と大きく異なっている自分の気持にも気づいてしまった。
「何て無茶するんだ。お前は1ヶ月近くも眠ってたんだぞ。」
ヒカリは、元の世界に戻って来て１ヶ月も時間がたっていることに驚いた。
以前よりも、一回りほど細くなった自分の手首を見て実感する。
「父さんや母さんも、心配してるんだ。これ以上心配を掛けるなよ。今、連絡したら父さんは直ぐに来るって。母さんは、動けないから来れないがずっと心配していたんだぞ。」
「動けないって、洋子さんどうかしたの？」
洋子とは、隼人の実の母であり、ヒカリにとっては義理の母だった。
ヒカリの質問に、隼人は少し考えてから答えた。
「ヒカリがどう思うか分からないけど、俺達に兄弟が出来たんだよ。ヒカリ、母さん妊娠してるんだ。」
「そうなんだ。」
突然に知らされた事実に、どう反応していいか分からず自分でも冷たい言葉だったと思うがそれ

しか言えなかった。
以前のヒカリなら、自分が居ない間に勝手な事をと怒りを覚えただろう。だが以外にも、口から出た言葉は素っ気ない言葉だった。自分でも冷たい言葉だったと思うがそれしか言えなかった。
複雑な思いがした。喜んであげたい気持の方が勝っているのに素直に喜べない意地っ張りな自分が居た。
そんな自分に、何だか悲しくなって来て涙がこぼれ出すと薄汚れたヒカリの心を涙が洗い流してくれたのか晴れ晴れとした気分になった。
隼人が、心配そうにヒカリの反応を伺っている。
ヒカリは、気づくと隼人の顔を見て笑顔を浮かべていた。
もういい、もういいんだこれで。子供の様にどうしようも無い事にダダを捏ねるのはもうよそう。それに姉になるのもそんなに悪くない気がした。
「ありがとうお兄ちゃん 。」
不意に言われた言葉に隼人は驚いた表情を浮かべたが、直ぐにヒカリの想いを察してくれた様子で笑顔を返してくれた。
「先輩、看護師さん呼んで来ましたけど 」
と病室に遠慮がちに、ヒカリと一緒の高校の制服を着た男性が入って来た。最初、隼人の友人かと思ったが顔を見て自分のクラスメートの神崎 弘人である事に気づいた。神崎は、ヒカリを見ておうと素っ気なく声を掛けて来ただけで何も言わなかった。
なぜ、神埼がここにいるのか不思議に思い隼人に聞くと。神崎が学校のプールで倒れていたヒカリを見つけて警察に通報してくれてその縁で見舞いに来てくれたらしい。
ヒカリがお礼を言うと神崎はまた、おうと素っ気なく答えた。
隼人が、父を迎えに行くと言い部屋を出て行くと神崎は、ヒカリの方に寄ってきた。
「なぁ木ノ葉、お前何でプールに倒れてたんだ。」
最もな質問だった。なぜ聞いてこないのか不思議に思っていたぐらいだった。自分も行方不明だったクラスメートが学校のプールに倒れていたら疑問に思うだろう。
神埼は、長いこと行方不明だったクラスメートに興味があるように見えた。
「神崎くんにお願いしたい事があるんだけど手伝ってくれたら教えるわ。」
「何だよそれ、ずるくない。」
神崎は、少し不信がって渋っていたが好奇心の方が勝ったらしくヒカリのお願いを聞いてくれると約束した。

　約束どうりに次の日もまた、神崎は見舞いにやって来た。
ヒカリが、神崎が持って来た制服に着替え人目を避けながら病院の裏口から神崎が押す車椅子に乗って外に出ると、外は木の葉が散ちり冬がもうすぐそこまで来ていた。
「何だか浦島太郎にでもなったみたい、この間まで桜の花が咲いていたはずなのに。」
神崎も空を見上げていた。
「そうだなぁ。木ノ葉が居なくなったのは4月頃だったからな。季節も分からない所に居たんだな木ノ葉は、外国にでも行ってたのか？」
「まぁ、そんなところなのかなぁ。私にもどう説明したらいいか分からないの。ありがとう神崎くん手伝ってくれて。きっと家族に頼んでも当分は、外に出してもらえそうに無い雰囲気だったから。」
「そりゃそうだろう。半年しも行方不明だった娘が帰って来た途端に緊急入院じゃ仕方ない。まぁ、暇だったしな。それに何か大事な事があるんだろ。また無理して倒れられる方が心配だからな。」
今は、平日の午前だった。普通なら神崎は学校に居るはずの時間だ暇なわけが無かった。
「神崎くんて優しいんだね知らなかった。」
「そうでもない。ただの好奇心だよ。」
と神崎は素っ気なく言うとヒカリから視線を反らした。
ヒカリは自宅の庭に行ってくれるように神崎に頼んだ。裏口から入って直ぐが庭だった。
見慣れた何時もの自宅の庭。庭の隅には、枯れた桜の木がひっそりと植わっていた。
桜の木が枯れてしまい花を咲かさなくなてから庭の片隅にある枯れた木の事など誰も気に掛ける者はいなくなっていた。忘れられた桜の木。
「枯れてるけど立派な桜の木だな。」
神崎は、枯れた桜の木を眺めながら言った。
「うん、私のお父さんが産まれる前からここに植わっていたんだって。何時でも、私達家族を見守っていてくれた木だったのに、何年か前から花を咲かさなくなってね私もお父さんも桜の木があった事なんて忘れてた。」
「それでも、この桜の木はずっと木ノ葉の事を見守っていたのかもな。ほら、今も君の帰りを喜んでいるみたいだ。幹の下の方を見てみろよ。」
神崎が、指差す方を見ると桜の幹の根元から一本だけ小さな若い枝が伸びていて、そこには季節外れの桜の花が咲いていた。ヒカリが、帰って来るのを待っていたかのようにそこにだけにまだ春が残っていた。
ヒカリは、桜の木に惹き付けられるように急に車椅子から立ち上がると桜の木の前まで行き手の平を木の幹に重ね自然と枯れ木に語り掛けていた。
「ご免なさい、気づくのが遅くなって。ずっとあの時から私を待っていてくれたのに。」
ヒカリが桜の木に語り掛けると木の周りの空気が揺らめくのを感じた。人の気配がして気配のす

る方を見ると、其処には龍美が何時もの優しい微笑を浮かべ立っていた。
ヒカリは、驚いてはいなかった。前からそんな気がしていたのだ。白龍と龍美は元々繋がっていたのだから不思議な事では無かった。
「龍美、もう行ってしまうの。」
龍美の体は、うっすら透けていて空気の様な存在になり掛けていた。
「すまないヒカリ。私の器としての寿命は、尽きた。いや以前から尽きていたんだ。君に出会ったあの時から。
あの時、ここに来たのは、あの子と黒龍だけでは無かったのだよ。最初に君を見つけたのは、あの子の中にいた白龍だった。同じ器に光と闇どちらも納める事は出来ない。だから白龍は新しい器として君を選んだ。
だが、まだ幼い君では白龍の強大な力を納め切る事が出来ないと悟った白龍は力を幾つもの器に分けて納める事にしたのだ。その中には、あの子も含まれていた。
だから、あの子の中には白龍と黒龍の力がどちらも備わっていたのだ。」
「ちょっと待って、でも私の中には白龍は居ないわ。私が、器なら私の中にも白龍が居ないと変じゃない。私の中に白龍が居たのなら直ぐに龍美や月下が気付いていたはずだわ。」
龍美は、枯れ果てた桜の木を見て言った。
「君の代わりに器になったのがこの木なんだよ。古い木には、力が宿るものだ。それにこの木は君ともとても縁が深いものだった事も選ばれた理由だろう。」
枯れ葉すら無く、ただ立ち尽くし朽ちて行くのを待っているだけだと思っていたのに。この木は、白龍を受け入れずっとヒカリを見守り守っていたのだった。
「桜の木が急に枯れたのは、そのせいだったのね。夢に出て来たのは、私にその事を思い出させるためだった。私をずっとあの時から待って居てくれたのね。」
「そう。ずっとあの時から君が、気付いてくれれのを待って居たんだ。この桜の木だけでは無く、彼もまた。」
龍美が桜の木の影に視線をやるとそこには、小さな人影が見えた。
小さな人影は、遠慮がちに木の後ろから顔を覗かせるとヒカリと小さく呟いた。まだ、桜の木が枯れずに花を咲かせていたころに初めて会った時と同じ姿で少年はヒカリの前に立っていた。 少年は、ずつと待っていたのだヒカリが自分を受け入れられる器になるまで。
「あの時からずっとそこにいたのね。私、気付いてあげられなかった。貴方は、名前すら私にくれたのに。私は、忘れてしまっていた。」
ヒカリは、少年に近づくと紅く色づいた彼の頬にそっとふれた。そんなヒカリに少年は、微笑みを返した。
「愛しい僕のヒカリ。ずっと君を見ていた。そして、君は気付いてくれた。」
少年の澄んだ蒼い瞳がヒカリの姿をを映す。
「今度は、私が貴方に気づく番だった。迎えに来るのが遅くなってごめんなさい。」
少年は、大人びた優しい眼差しをヒカリに向けた。
「僕は、大丈夫だよヒカリ。最後の最後に君が気付いてくれたから。きっと、今ならまだ間に合

う僕を取り戻してヒカリ。さぁ、僕の名を・・・。」
ヒカリは、魔法をかけられたかの様に少年の瞳から目が放せなくなっていた。瞳の色は違うが、彼もまた同じ瞳をしていた。何者にも染まらず、そして何処までも広がっている空のように自由で美しい。
「あなたの名前は、セイヤ。静夜よ。」
自然とヒカリはその名を口にしていた。
少年は、自分の名を大事そうにゆっくり口の中で呟くと満面の笑みをヒカリに返した。
「ありがとうヒカリ。やっとこれで僕は、僕の元に帰る事が出来る。」
と言うと静夜は、ヒカリに抱き着いたかと思うとヒカリの体に溶け込む様にして消えて無くなってしまった。
龍美は、それを見届けると
「行きなさい。君と月下は、白龍を通して繋がっている。白龍が君を月下の所まで案内してくれるはずだ。」
そう言う龍美の身体は、この世から離れて行くかの様に更に透けて形をなさなくなって来ていた。
「龍美、あなたを助ける方法はないの」
「いいのだヒカリ。私は、永く生き過ぎるぐらいに生きた。それに彼方できっと待って居てくれる者も居る。私は、私の一生を悔いを残す事なく生きた。
お前達のお陰だヒカリそれに静夜。皆に礼を言うありがとう。」
と言うと龍美の姿は、跡形も無く消えて無くなってしまった。
ヒカリは龍美を見送ると桜の木に向かい合い語り掛ける。
「行こう白龍、月下の元へ。 」
「おい、木ノ葉。行くって何処へだよ。」
黙って成り行きを観ていた神崎だったが、さすがに困惑した様子でヒカリを呼び止めた。
「また、何処に行っちまうのか？やっと帰って来たばかりじゃないか。あんな傷を追って、今度は死ぬかもしれないんだぞ。置いて行かれる人の事も考えろよ。お前は、独りじゃないんだ！」
神崎が言っている事はもともな事だった。ヒカリは、また心配してくれている家族や友人を置いて遠い世界に行くのだ。でも、あの時とは大きく違っていることがあった。
ヒカリの行く先にも、ヒカリを待って居てくれる人達がいる。選ばなくてはいけない何時かは・・・。
「神崎くん。私、大丈夫だよ。必ずもう一度ここえ帰ってくるから約束するわ。今回の事で、まだ私にはその覚悟が無い事が分かったから。 もう少し私は、私し自身と向き合わないといけないみたい。行って来ます。」
と言い残すとヒカリは異世界へと旅立って行った。

闇。

セブンズドアここは、神と生き物が共存する世界。
人は、神と交わる事で力と知恵を手に入れたが、神と交わる事は大罪であり禁忌だった。
神は人に罰を与えた。その罰とは、人で無くなり自然に帰る事。
セブンズドアの住人の一部の者を除いては、何か別の種の血が混じる半獣である。世代が進むにつれて、他の種の血は濃くなって行った。セブンズドアの大地に人が居なくなるのは、時間の問題だった。
だが、神は人に一つの約束をした。その約束を果たせば罰から解放しようと。
その約束とは闇と光、人とはどっちらなのか天秤を持って示せと神は言った。
今まさにセブンズドワの天秤は、闇に傾むこうとしていた。

闇は、人ごとラオスを飲み込みここユーリスにも闇の脅威が迫って来ていた。城下町では、人々が闇を恐れ神である王に助けを求め城に押し寄せて来ている。 城の見張りの兵士が、人々を宥めきれず血相を掻いて隊長である大河のもとへやって来た。
「狼隊長、もう限界です。我が国の民や近隣諸国の民までもが、太下に助けを求め城に押し寄せて来ております。門を破りそうな勢いです。私たちでは、抑えられそうに有りません。ここは恐れ多い事ですが、太下においで頂き納めて頂くしか方法は無いかと。」
大河は、門に押し寄せる民を見るとため息を吐いた。礼の姿勢で指示を待つ部下に視線を落とし哀れに思う。
「太下が、お出でになる事は無い。門を開けてやればいい。望みが叶えば暴動も少しは、抑えられるだろう。」
部下の兵士は、驚いた表情で大河を見返した。
「ですが、それでは太下の御身を御守りする事が難しくなります。」
「いいんだもう。命令だ行け。」
部下の兵士は、悲痛の表情を大河に向けるがそれ以上なにも聞く事なく大河の前から姿を消した。
もう一度、大河は押し寄せる民達の方を見た。その後ろには、荒れ狂う人々に無惨にも破壊され瓦礫となったもの達が転がっている。可憐だった草花は踏み荒らされ水路は破壊され水は濁り美しいかったかつての水の都城と謡われたユーリスの姿は其処には無かった。
「龍美様。貴方が愛し見守ったこの国は、やはり貴方と共にあるようです。」
龍美が息を引き取った事は、一部の者を除いて極秘になっていた。闇が襲って来る恐怖で心を乱した民達に告げればより暴動が激しくなるのは目に見えていたからだ。
龍神人で不死であるはずの龍美が亡くなるということは、白龍が姿を消した事を意味する。即ち神の審判が下され天秤は世界の滅びに傾いたと告げている。
もう、誰も止められる者は居ないこの世界にわ。我々には、審判が下されてしまったのだから。
「月下、早く戻って来い。どんな姿でも狼家は、俺はお前を受け入れる。我が主が出した答えな

のだから。」
幼いころから彼を見てきた。月下の名を受け継ぎし我が主を。彼は、過酷な運命を逃げる事なく精一杯に戦ったのだ。その結果がどんなものであっても受け入れる覚悟は、幼い主に膝をつき仕える事を誓ったあの時から出来ている。
空が分厚い雲に覆われ太陽の光は届かず、地上には闇が広がって来ていた。直に、ユーリスも闇に飲み込まれ跡形も無く消え失せる事だろう。空を見上げる大河の背後に人影が近づいて来る。
「大河、ここに居たのね探したわ。準備が整ったの始めます。」
と恋歌は、何時もと変わらぬ様子で告げたが大河の顔を見て眉をひそめた。有無を言わさぬ早業で彼女は、大河の鍛え上げられて太い腕を抱き抱える様に掴むと勢いよく歩き始めた。
「待て、恋歌。何処に行く気だ。」
恋歌を力任せに振り払う事も出来たが、そうすると体格差がある恋歌を投げ飛ばしてしまう恐れがあるため出来ずに大河は恋歌にされるがままの状態になっていた。
「そんな暗い顔をして、こんな所でボーとしてるなんて貴方らしく無くてよ。」
大河には、そんな自覚はなかった。恋歌に言われて始めて自分の変化に気づく。
「そんなに酷い面をしてるのか俺は。」
自分の顔をに触れてみるが分からなかった。
「立ち止まらないで大河。貴方まで立ち止ったら私まで不安になるじゃない。私は、最後まで生きるわ世界が終わるその時まで。」
大河は、以前に二人で星空を見上げ語り合った夜を思い返していた。
「受け入れるんじゃ無かったのか、二人が出した答えを」
恋歌は、確かにあの日の夜にそう大河に誓っていた。
恋歌は、立ち止まると大河の腕によりしがみついてきた。彼女の体の振動が腕を伝って伝わって来る。恋歌は、震えていた。大河にしがみついていなければ立っていられないほどに。
「あの子達が、出した答えなら受け入れるわ。
でも、自分の未来は自分で創るものよ。人任せにするのは違うわ。私は、私なりに自分の未来を諦めたくない。それに、二人だけに私達の未来を背負わせるなんて出来ないもの。
私は、私の精一杯の事をする。それでも駄目なら諦めが付くわ。そうでしょ。今、出来る事をしましょう。自分が後悔しない為に。それが出来ないのなら私の為に生きて大河。もう立っているのもやっとなのお願い。」
声を振るわせ少し潤んだ瞳で恋歌は言った。
あの勝気で勇ましい恋歌が、小さくなり自分の腕にしがみ付いて震えている。
そんな恋歌を見て身震いがした。現実に引き戻され事実を受け入れる事に。知らない間に現実から逃げていた自分に気づく。それほどに今この世界の置かれている状況は、現実離れしたものだった。悪夢のようでいて受け入れ難い事実だった。
自分が闇に呑まれかけていた事に気づき、大河はまた違った闇の恐ろしさを知った。
闇は、世界だけでなく人の心も飲み込んでしまうのだ。
さっき自分に助けを求めて来た部下の表情を思い出す。不安と焦りそして、恐怖が入り交じった

表情だった。自分も同じ顔をしていたに違いない。不安や恐怖は、伝染するのだ。行かなければやるべき事がある。
「立てるか恋歌。すまんが、一緒にいてやる事は出来ない。やるべき事を思い出した。今はまだ、俺の為に生きなきゃいけないみたいだ。」
恋歌は、少し複雑で寂しそうな表情を浮かべていたが体の震えは止まり何時もの凛とした姿に戻っていた。
「私達は、やっぱり何時になっても一緒になれないわね。二人とも、まだ自分の為にしか生きられ無い。何時かは、人の為に私は生きてみたいわ。だから死なないで。」
恋歌は、大河の手を両手で握りしめ祈る様に言った。
「恋歌お前も死ぬなよ。きっと迎えに行く。」
大河は、恋歌にそう告げると民達が、押し寄せる表へと出て行った。

光。

　ユーリス城地下にある闇の間。そこは死臭が漂い、闇への恐怖が人を人ならざる者へと豹変させる。
そんな場所に、国中の巫女達が集められていた。巫女達は、部屋の中央から輪を描くように立ちその輪の中心にはキリコである恋歌が立って居た。
一人の巫女が輪を離れ恋歌に近づいて行く。彼女は、おお神子に仕える側近の巫女でツバメと言った。
「恋歌様、よろしいですか。ここは元は、聖なる場所でした。ですが、黒龍を封印する事で気が濁ってしまっているのです。
ここを浄化すれば、この城の結界は強化され闇の侵入を少しの間なら防ぐ事が出きると思われます。
もとを辿れば、ここは神と人とを繋ぐ場所。きっと白龍と繋がっているはずです。」
恋歌は、ツバメの言葉を聞き終えると祈る様に瞳を閉じた。他の巫女達も、恋歌と共に祈りを捧げる。死臭が漂う空間に清い気が立ち上る。
巫女達の祈りが始まって直後の事だった。
誰も通さないよいにと兵に申し付けていたはずが、城に通じる扉が開き一人の白髪の少女が巫女達の輪に加わった。良く見ると少女は、異国のボロボロの衣を纏っている。
皆が急に現れた少女に視線を注ぐが、少女は気にも止めていないようだった。
少女を見て一人の巫女が、アリア様と叫んでいた。その巫女とは、ツバメだった。アリアに続いてジンとライラが姿を現した。
直ぐに恋歌は、少女がおお神子であると察し少女に歩み寄ろうとした時だった。
「皆、離れなさい。来ます我らの光が龍を連れて。」
とアリアが告げたと同時に、床から光の渦が現れ気がついた時には光の柱となって城を突き抜け天を射ぬいていた。

ヒカリが気づいた時には、セブンズドアの上空を浮上していた。
足下には、分厚く黒い雲が大蛇が這うようにうねりながらセブンズドアを覆っている。
「これが、セブンズドアなの。以前は海や緑が広がっていたのに。」
大地や海は、色を失い黒一色の世界になろうとしていた。
「黒龍の力だよ。このままだと世界の全てが闇に覆い尽くされて、光が届かない世界になってしまう。
光の無い所では、生き物は生きて行けない。セブンズドアは、滅んでしまうだろう。」
不思議なことに静夜の姿は見えないのに何処からか声だけが聴こえてくる。
「静夜、月下はどこに居るの。私は、どうしたら。」
「飛んで行けばいい。君は龍だ。ヒカリが、望めば白龍の力が目を醒まし力を貸してくれる。
それに、白龍を通してヒカリは彼と繋がっているはず。光と闇は惹かれ会うもの。どんなに離れ

引き合う事を拒もうとしても出会う運命なんだよ。
だから、ヒカリは時空を越えてここに居るのだから。」
ヒカリは、胸に手を当てて自分の心に問いかけてみる。自分にとって月下という存在とは何なのか。
最初は、嫌な奴で大嫌いだったのに月下の事を知るたびに彼に惹かれていった。
彼に惹かれている自分に気付いていたけど気づかないふりをした。なのにこんな私を月下は、命をかけてラオスまで助けに来てくれたんだ。
今度は、ヒカリが月下を迎えに行くばんだった。
ヒカリの想いに応えるように光の柱は白く輝く龍に姿を変えた。地上では、ユーリスの民達が白龍の姿をみて歓喜の声を上げている。
白龍は、少しの間だ同じところで留まり方向を定めるとゆっくりと動き出し闇の中に消えて行った。

黒く分厚い雲のなかは、雷雨で酷い嵐だった。
白龍は、その中を迷うことなく進んで行き雲の中を抜けて地上に降りて行くと山肌に紅い柱が特徴的な大きな神殿のような建物が姿を現した。神殿の後ろには、延々と樹海が広がっている。
何時かジンの夢の中で見た建物によく似ていた。
「ここは、もしかして幻影の民の神殿。」
よく見るとほとんどの建物は、無惨にも破壊されており人が居る気配もなかった。幻影の民達は、ラオス王の生け贄にされるためにラオス軍に皆が捉えられたからだった。
白龍は、神殿の上を通り過ぎどんどん樹海の奥へと進んでいく。 急に木々が消え小さな湖が現れると中央に白い石造りの小さな社のような建物が姿を現した。
白龍が、湖に降り立つと白龍の姿は消えてなくなり代わりにヒカリの姿が現れる。 ヒカリと白龍は、同じ者になっていた。
ここだけは、黒龍の影響を受けずに何故か空気が澄んでいる。 ヒカリは黒龍の気配を感じていた。
「ここに月下がいるのね。」
ヒカリは、石造りの鳥居のような物を潜り抜けて社に入ると祠を見つけ下へと降りて行く。
祠の中は、明かりもなく暗闇が広がっていた。壁を伝いゆっくりと下へ下へと降りて行くと以前に嗅いだ事のある悪臭が漂って来た。何とも言えない肉が腐ったような嫌な臭いがした。
それは月下が黒龍に姿を変えた際に匂ってくる臭いに良く似ている。
祠の底まで降りると、足下からポチャと言う音がして冷たい水の感触があった。暗闇で確認は出来ないが、祠の底には水が溜まっているようだった。
底に着くとより一層に鼻につく嫌な臭いがする。
ヒカリは、以前に月下が黒龍に姿を変えた時の事を思い出していた。あの時は、恐怖で足がすくみ動けなくなり月下の事が堪らなく怖く感じた。
今でも、まだ恐怖は感じている。でも、あの時と違って彼を知り信じていた。 だからヒカリは自

分の恐怖心に負けない気持ちがあった。
「居るんでしょう黒龍！約束を果たしに来たわ。」
ヒカリの言葉を聞き、暗闇の奥で何かが微かに動く気配がした。
「姿を現しなさい黒龍！」
「我らが望むならば・・・。」
とヒカリの言葉にこたえて、低くこもった声が祠内に響くと急に視界が明るくなり黒龍の姿が現れる。
闇に染まり黒く堅い鱗に覆われた肌。大きく裂けた口からは鋭い牙が幾つも並んでいる。背には大きな体に似合う大きな翼が見えその姿は神と言うよりは悪魔に近い気がする。
「黒龍、ここはどこなの何だか懐かしい気持ちがするところね。不思議ね一度も来た事が無いはずなのに。」
くもりのない緋色の大きな瞳に、ヒカリの姿が写っている。恐怖心からか黒龍の瞳の中に自分が囚われてしまっているような錯覚に陥りそうになる。
「お前に無くても、我らにはある。ここは、神と人がまだ別のものだった時代に人が神を崇める場所だった。そして、約束の地となったのだ。」
「ではここが、人と神が交った場所なのね。」
遥か昔にセブンズドアの人々は、自分達の欲の為に神を利用しようと捕らえここに幽閉したのだ。
そして、神の怒りに触れた人々は神に許しを請うために神と約束を交わし神と交じわう事でこの地で生きて行く事を選んだのだった。
「太古の約束をもう人は忘れてしまっていたのだと思っていた。」
と黒龍は、少し悲しみのこもった声色で告げた。
「忘れていたのよ。でも思い出したの貴方が覚えていたから。」
「我々が、忘れるはずなど無い。あの約束は、我らの願い。神である我らが、人に願ったのだ可笑しいだろう。
だが我らの願いは、人にしか叶えられない願いだった。」
今度はヒカリが口を開く。
「そう。永い年月をかけて少しづつ叶えなければならなかった。黒龍、彼を月下を返して願いを叶えるために彼は必要よ分かるでしょう。」
「あれが必要だと。あんな弱い心で己を信じる事すら出来ずに、今も我のなかで小さくなり眠っているのに。
それに闇と光は、決して交わる事などできはしない。出来たときこそ、我らの願いが叶う時。」
黒龍の鋭い目がヒカリを訝しげに睨む。
「人とは、そういう生き物なのよ。完璧には、なれないのだから人なのよ。人は、対で産まれてくると言うわ。産まれた場所が違ってもいつかは出会う運命なのよ。
だから、私と月下は出会ったのよ、お互いを支え合うために。貴方が出逢わせてくれたんだわ。貴方の想いが、私達を引き合わせたのよ。信じて彼を貴方が選んだ人を。」

黒龍を説得するように語り掛けるヒカリを見ていた黒龍は、急に目を細めヒカリを愛しそうに眺めた。
「我は、お前が欲しい。我の半身よ、輝く光よ。お前が、あやつを選ぶと言うならいたしかたないだろう。私は、お前を拒む事は出来ない。何百年の時をかけてお前が現れるのを待っていたのだからな。
今やっと我らは、人の事を少し理解出来たのかもしれない。人を愛しく想う心。我には無いものだった。光よ生か死か今こそ審判の時。」
熱のこもった黒龍の視線がヒカリに向けられる。
「きっと彼を捕まえてみせるわ。」
「我もそう願う。」
と黒龍は、静に呟くと自分に近づくようにヒカリを誘う。
ヒカリは、黒龍に誘われるまま黒龍の中へ探る様に手を入れると腕を何かに捕まれてそのまま黒龍の中へと引きずり込まれた。

　黒龍の中は、何の気配も無く静が支配する闇の海が広がっていた。
ヒカリは、闇の海の底へと沈んで行く。闇に身を任せ沈んでいると、急に何かにぶつかり沈まなくなった。足下には、まだ永遠と闇が続いているのにヒカリは進む事が出来ない。
黒龍の言葉を思い出す。
闇と光は、決して交わる事は無い。
ヒカリは、闇に拒まれていた。月下に自分の声を届けるために闇の海の何処に月下が居るのか知る必要があった。
ヒカリは、闇に耳を澄ます。闇の底から微かに月下の息づかいを感じた気がした。
「月下。」
彼の名を呼ぶが、返事は返って来ない。
どうにかして、この壁を壊せないかと叩いたり押したりしてみるが無駄な抵抗だった。光と闇を隔てる壁はびくともしない。
少しでも彼を感じようとヒカリは、横たわり耳を壁に押し当てる。今も、闇の底から一定のリズムを刻み息づかいが聴こえて来る。
ヒカリは、自分が月下に惹かれているのを感じていた。今も、彼の事を考えるととても愛しくて胸が締め付けられて苦しくなる。この気持ちを早く伝えたいと思った。
ヒカリは、壁の向こう側にいるはずの月下に語り掛ける。
「私はね。私を貴方に知って貰いたい。そして、貴方を知りたいの。貴方に私は、染まりたい。人を光と闇で隔てる事は出来ないわ。だってどちらも持っているから人なのよ。
だから、私は闇なんか怖くない。貴方が私を拒むと言うのなら、私が貴方に染まってあげる。
闇よ、私の心をあげる。私の心を喰いなさい。私は光なんかじゃないは、嫉妬、怒り、妬み負の部分を持っているもの。
昔の私は、自分の事ばかり考えて人の気持ちなんか考えていなかった。自分だけが傷つかなければ良いと思っていた。でも、私は貴方を知り人が傷つく痛みを知った。私は、自分が傷ついたとしても貴方を守りたい。」
ヒカリは、闇に自分の心を差し出した。闇は、ヒカリの望み通りにヒカリの心を喰い闇に染め上げて行く。
闇が、ヒカリの体にまとわりつきながら這い上り体を闇に犯され激痛が走る。痛みの為にヒカリの表情が歪む。
「これで私は、光でも闇でもないわ。 私と貴方を隔てるものは、もう何も無い。」
とヒカリが言うと同時に、ガラスが割れるような音がしてヒカリと月下を隔てていた壁が壊れていく。ヒカリが、再び闇の底へと沈んで行くと息づかいがだんだん近づいて来る。
暗く広い闇の海の底に、膝を抱え小さくなり子供の様に眠る月下が居た。
やっと見つけた。
ヒカリは、丸くなった月下の体を抱き寄せると彼の体から体温を感じる事が出来きほっとする。

生きてる。生きていてくれた。
ヒカリの瞳から涙が溢れだす。嬉しくて、愛しくて自分が思っていたよりも激しく心が波打つのを感じた。
ヒカリに気づいたのか、月下が目を醒まし顔を上げるとすぐそこにヒカリの顔があった。色鮮やかな緋色をした虚ろに揺れる瞳が、ヒカリを心配そうに見詰めている。
月下の大きな手の平が、ヒカリの頬に触れる。
「月下。わたし。私は、貴方が・・・。」
伝えたい気持ちがあるのに、本人を前にすると焦る余りに言葉が上手く出てこない。代わりに涙が、ぽろぽろとこぼれ出しヒカリの頬を濡らす。
ラオス城で彼が黒龍に姿を変えて城から飛び立って行く姿を見た時には、もう会えないじゃないかと怖くなった。だけど今彼は、自分の前に居る。まだ、虚ろに開いた瞳でヒカ
リを不思議そうに眺めながら月下が呟いた。
「また、俺の代わりに泣いてくれているのか？そんなお前が、俺は凄く愛しい。」
と言う月下の表情を見てヒカリは、はっとした。何時もの勝ち気な人を遠ざけるような笑みとは違い穏やかで優しいし微笑みだったからだ。
ヒカリが月下の表情に見とれていると、月下はヒカリの体を急に抱き寄せて唇に優しいキスをした。
それでヒカリは、我に返り自分の役目を思い出した。
月下が、力一杯にヒカリの体を抱き締めている。話をしなければいけないのに顔を彼の胸に押し潰されて話すことが出来ないでいた。
「月下、離して苦しい。」
と彼の体を押し返しながら告げると月下は、渋々腕の力を緩めてくれた。少し不満そうな彼の表情にヒカリは、少し申し訳ない気持ちになったが今はセブンズドアの緊急事態なので仕方がないと思う事にした。
ヒカリには月下に告げなくてはならない事があった。
「貴方に預かっていたものを返すわ。貴方は、私に名前と一緒に光をくれた。
黒龍と白龍は、元々はどちらも貴方を器として選んでいたのよ。貴方は、始めから闇でもなく光でも無かった。どちらも受け入れる器を持っている人だった。
貴方の名は、静夜。この世界にもっとも愛されて神の願いを叶える為に産まれて来た人よ。さぁ選んで、この世界の行く末を未来を。」
人と神が交わる事で、闇と光が生まれた。静夜は光で、月下は闇だった。彼は、二つの名を持つ器。だが、一つの肉体に闇と光どちらも宿す事は出来ない。光か闇どちらかを選らばなければならなかった。
何処からか声が聴こえてくる。
「さぁ、人よ。答えるがよい、滅びか再生か我の願いを叶える為に。天秤をもって示せ。」
月下は、ヒカリの体を離れない様に抱き寄せながら声のする方を見据えていた。
「神よ。人は、闇も光も持っているから人なのだ。その事を俺にヒカリは教えてくれた。闇と光

を比べる事など出来わしない。
闇と光が交わらないのは、重なりながら糸の様に紡いで行くものだからだ。どちらかが欠ても、人は人では無くなってしまう。神と人も同じ、光が神なのならば闇は人だ。真逆の存在であっても互いを知り寄り添う事で共に生きて行けよう。
神よ共に生きよう。人と共にこの地で。それが貴方の願い。貴方に人の名を。」
月下は、人の答えを神に告げた。神と人、違いはあるがこの地で生きている事は同じこと。
お互いを隔てる事なく共に生きて行こうと。それが、人の答えであり神の願いだった。
月下が、答えを言い終えると少し間を置いて神が答えた。
「我に人の名を。それが人の答えか。いつしか人は、神に頼らずとも自分達の知恵だけで何もかも手に入れられるようになっていた。
人は、我のまねごとをして我の創ったものを壊せば産み出しもする。この世界のものは、全て我の子だ。だが、子は我を愛しはしなかった。その中でも人は、我を道具としてしか見てはいなかった。
我は、人が愛しくて憎かったのだよ。だが同時に人に愛されたかったのだ。親が子に愛されたいと思うのは自然な事だろう。
共に生きよう人よ。我の名は静夜。人の子に産まれこの地で生きて行く。それこそ我の願い。」
神は、神であることを辞めて皆と共に生きて行きたかったのだ。今度は、愛するだけでなく愛し愛されるものになりたかった。それが神の願い。
だから神は人と交わり神でないものになろうとした。だが人には、神と違い光と闇の感情が存在し完全に交わる事は出来ずに光と闇に分かれてしまった。その結果、神の力が暴走し人とはかけ離れたものになってしまった。
どうすれば闇と光が交わり一つのものになれるのか、その答えを神は人に託したのだった。世界の天秤が闇と光どちらに傾いていたとしても、神の願いは叶えられずセブンズドアは滅んでいたことだろう。
神の言葉を聞き、どちらからでもなく自然に月下とヒカリは顔を見合わせ微笑み合った。
「ヒカリ下を観てみろ。」
月下に言われてヒカリが、足下を確認すると暗闇に転々と小さな明かりが灯り真下には青く輝く大きな青い球体が浮かんでいた。
「もしかして、これがセブンズドアなの。これが、私達の望んだ未来。」
闇に覆われて輝きを失っていたはずの世界が、生き返っていた。灯りだと思っていたものは、全てセブンズドアの周りにある星達だった。
「とても綺麗ね。宝石みたい。」
「ヒカリのお陰だ。ありがとう。
ずっと後悔していたお前を関係ない争いに巻き込んでしまった事を。すまなかった。」
「謝らないで私は、これで良かったと思っているの。貴方やユーリスの皆に出会えた事で私は、変われたのよ。人を思うことを知る事が出来た。そして強くなれたの。
見て月下。あれは、私の星よ。」

ヒカリが指差す先に、不思議な事に地球が見えた。
見知った美しい星。彼処には、ヒカリを待っている人達がいる。でも今では、セブンズドアにもヒカリを待っている人達がいた。そして、目の前に居る彼もまたセブンズドアの住人。
「ヒカリ、俺は。」
ヒカリの思いを察したのか月下の表情が急に険しくなった。
「大丈夫よ。だって私と貴方は、もう繋がっているもの。待っているから早く迎えに来てね。
月下、大好きよ。」
と今度は、ヒカリから月下にキスをする。お別れのキスじゃなく、再会を約束するキスだった。
キスをした瞬間にヒカリの体は消えてなくなっていた。
必ず迎えに行くから愛しい君を・・・
と言う彼の甘い囁きが聴こえた気がした。

始まりの季節。

　ヒカリが、セブンズドアから戻って来てから二度目の春がやって来ていた。
ヒカリは、この春に高校を卒業したのだが弓道部の指導を顧問に頼まれた為に週に何度かは、高校に足を運んでいた。今も、指導を終えて校門まで続く桜並木を歩いているところだった。
風に吹かれて、散る桜の花びらに目に止まる。セブンズドアから戻って来て二度目の桜が散っている。
あれからまだ月下は、ヒカリの前に現れていなかった。もう二度と会えないのではと時々弱気になった時に考えてしまう事もあるが、ヒカリは信じていた。
別れぎわに聴いた彼の言葉を。
「おーい、木ノ葉！来ていたのか」
と背後から呼び止められて振り向くと。そこには私服姿の神崎が、手を振りながら近づいて来ていた。神崎には、病院を抜け出す手伝いをして貰ってから仲の良い男友達になっていた。
セブンズドアから戻るとヒカリは、また病院のベッドで目を醒ました。その時には、家族全員がヒカリの病室に居てヒカリが目覚めると皆が安堵し、義理の母は涙を浮かべ父ですらが今まで見たことのない疲れ切った表情で良かった、良かったと何度も同じ言葉を繰り返し涙していた。
後から神崎に聞いた話では、ヒカリが静夜とセブンズドアに向かった時にヒカリは体ごとセブンズドアに渡ったのだと思っていたが、違っていて精神だけがセブンズドアに渡り元の世界にヒカリの体だけが取り残されていてヒカリの精神がセブンズドアに渡るとヒカリの体が光を放ち急に地面に倒れ込み意識を無くしてしまったそうだ。
その後、病院に救急搬送されてからまる一日意識を取り戻さず昏睡状態が続いていたんだとか。
神崎は、ヒカリを病院から連れ出した事が張れてしまい親や学校から大変叱られたのだった。
「木ノ葉、お前てやつは推薦を断ったて本当か？竹ヤンが泣いていたぞ」
竹ヤンとは、弓道部の顧問の竹内の事だった。
ヒカリは、セブンズドアから戻ってから今まで逃げていた現実に向き合う事にした。
父や義理の母と義理の兄になった隼人との良い関係を築くためにこの2年間ヒカリなりに努力して来た。そのお陰か、今では以前ほど家に居るのが苦痛では無くなっていた。
隼人の事は、今でも好きだがそれは敬愛する兄としての好きにすっかり変わっていた。
弓道にも打ち込み大きな大会で入賞するぐらいの腕前になっていた。そんなヒカリを見込んで、弓道部の顧問である竹内がヒカリを弓道で有名な大学に推薦してくれたのだがヒカリはアッサリそれを断ったのだ。
「良いのよ。私より相応しい人が居ると思ったから断ったの」
「何だよそれ。それに、あっさり地元の大学に進学だろ。木ノ葉ならもっと上を狙えただろ。」
と不服そうに神崎は、言った。
「なんて言うか、まだ決めかねているのよ。もう少しだけ待ちたいの」
とヒカリは満開の桜を観ながら言う。
「何をだよ。時々また木ノ葉が、居なくなってしまうような気がして心配になるよ。確りしてく

れよ。俺らも、大学生なんだからもう子供じゃ居られない。」
と言う神崎の言葉を聞いてヒカリは、我慢できず吹き出して笑ってしまった。
「真面目ね、神崎君は。」
「いいだろ真面目なのは、悪い事じゃない。そうだ、今年もまた木ノ葉の家の庭の桜の木を観に行ってもいいかなぁ？
あれを観ないと新学期が始まった気がしなくて。」
「良いわよ。今日は、午後から予定ないしね。家族も出てるからうちでお花見にしましょう。おやつは任せたわ」
「じゃ後で。」
と手を振りながら神崎は去って行った。
桜とは、ヒカリの家の庭に植わっている古い桜の木の事だった。枯れてしまい花を付けなかったのだが、最近になって新芽が根本から生えてきて、その新芽が成長し花を咲かすようになっていた。
神崎は、その桜を気に入ったらしく毎年ヒカリの家に花見に来るようになっていた。高校を卒業し神崎との接点が無くなり、今年は見に来ないだろうと思っていたので嬉しかった。

家に着き荷物を置くと、直ぐに桜の木がある庭の方へ足が向いた。
春の風が吹いていて、サラサラと髪を風が撫でる感触が気持ち良よく優しいし陽射しにうっとりする。
こんな時、ヒカリは幸せを感じる様になっていた。きっと、心が強くなったからだとヒカリは思っている。あの異世界で過ごした時間が、無駄なもので無かった事を今の自分が証明しているのだ。
縁側に腰を降ろして、小さな桜の木を眺めてみる。まだ細い枝だが力強く上へ上へと伸びている。花は、数える程しか咲いていないがそこがいっそう生命力を感じさせた。
この桜の木を眺めていると、何時も彼の事を思い出してしまう。彼と始めて会ったのが、この桜の木の下だった。母の死を受け入れられなかったヒカリを優しく慰めてくれた。
今思えばあの時からもう既にヒカリとセブンズドアは繋がっていたのだ。
「セイヤ・・・。月下、忘れないで。約束したでしょう。必ず・・・」
とヒカリが約束の言葉を告げようとした時だった。背後に人の気配がし懐かしい声が約束の言葉を口にした。
「必ず、君を迎えに行くと・・・。」
体が、震えそれを止めようと丸くなり自分の体にしがみつく。それでも震えは、止まらなかった。
「ヒカリ」
と懐かしい声が、自分を呼んでいる。ずっと待っていたこの瞬間を。でもそれは、同時にこの世界との別れも意味していた。この2年間ずっと考えていた、自分が居なくなったこの世界の事を。父、義理の母や兄の事。きっとまた悲しませてしまう。振り返ったらもう後戻りは出来ない。そ

れでも、この人と生きて行きたいと強く願ってしまう自分に気付いてしまった。
覚悟を決めて振り返る。どんな顔をして、どんな声を最初に掛けようかずっと考えていた。けれどそんなものは無駄だった。
「遅いじゃない、何してたの。それに愛しいが抜けてるわ、バカ月下！」
と振り向くと同時に、何時もの可愛く無い言葉が出ていた。
彼は、そんなヒカリをあの時に見た優しいし笑顔で見詰めていた。
風に靡く黒髪に綺麗な緋色の瞳が良く似合っている。彼の瞳に写り込んでいる自分の姿が、目の前に居る彼が夢でない事を証明していた。
月下は、ヒカリに手を差し出すと
「帰ろうヒカリ。俺たちの世界へ。静夜も待っている。俺は、もう迷わない君が必要なんだ俺にわ。離れてみて良く分かった。この世界の君の家族には申し訳ないと思っている」
月下が、ヒカリの事や家族の事を思い悩んでくれた事が伝わってくる言葉が嬉しかった。本当に彼は、優しくて強い人だ。でも、ヒカリは彼の弱い部分も知っている。
だから、隣に居てあげたい。そして居て欲しい。ヒカリは月下の手を取り立ち上がると月下を見上げた。
「いいのよ。大人になれば皆、親のもとを離れるものそれが少し私の場合は早まっただけ。うちには、優秀な兄もいるしね。それにもう私は、セブンズドアの住人よ。
私の中には、静夜が居るんだもの。あの子の為にも、私はセブンズドアで生きる事を選ぶわ。」
月下は、ヒカリの言葉を聞き少し肩の力を抜いて苦笑いした。
「ヒカリ、お前は強い。何故、白龍がお前を選んだのか分かる気がする。」
「違うわ。私を選んだのは、黒龍でも白龍でも無いあなたよ月下。」
月下は、目を細めてヒカリを眩しいそうに見詰めながら優しく腕の中に包み込むように抱き締めると誓いの口づけをした。
二人が、セブンズドアに向かおうとした時だった。庭の門が開き木ノ葉と呼ぶ神崎の声が聴こえて来た。
ヒカリは、月下の胸に顔を埋め振り返らなかったが代わりに月下が、彼を見据えお辞儀をした。
その瞬間に二人の姿は、この世界から消えて無くなっていた。

春の風が吹き桜の花びらを拐って行く。始まりの季節が通り過ぎて行った。

end.

あとがき。

久々に あとがきを書いてみる。

知らない間に年月が過ぎて、月のヒカリを書き始めてから４年。
最初の文書を読み返して、最近のものを読むと少しはましになった気がする。
初めて、書いた長編？作品が完結できて良かったです。

まだまだ、文章と言うものが分かっていませんが、思うまま書くのは楽しい。
仕事ではなく趣味なのでこれで良いのだと思います。

今度は、短編を中心に書こうと思っています。
短編は、いろんな世界を創造でき冒険できるので楽しいです。

もし、月のヒカリを最後まで読んで下さった方がいたとしたら心からの感謝を。

モカ